

横川先生と佐伯市

「郷土の研究」に学ぶもの

会員 山本 保

すでに郷土の自然、災害、農牧業、交通、くらし等について述べてまいりましたが、今回は、資源について紹介いたします。

六 郷土の資源 その一

横川市吉著  
郷土の研究

今年（昭和二十四年）は、特に不漁が伝えられています。これまで、佐伯湾を埋める、明るく集魚燈の光は、湾内一帯の漁村の経済を豊かにしました。いりこの袋は、漁連の倉庫に山と積まれ、トラックで盛勢よく各地に運ばれました。

大島の一木づりのさわらは、正月魚として佐伯市にたくさん送られました。

それが、今年はどこも、さっぱり魚がとれないそうです。

蒲江の人の話では、十一月、十二月頃、干場もなくなるほどだったわしが、さっぱりとれなくなり、島の浦（宮崎）の沖にずつと乗り出しても、魚を祭見しないということです。

この不漁の原因は海流の変化、つまり暖流が衰え、

その代りに寒流が発達したためだと伝えられています。なかなか科学的な見解です。たしか新聞にも出ていたように記憶しています。

こちらでは初めてらしいが、紀伊半島の沖では、今まで既にこんな事が経験済みなのです。しかし、海流の調査は、多くの費用や設備を要する困難な、国家的な事業です。

今年の不漁の原因が、本当に海流異変によるのか、この異変はいつまで続くそうなのか、その異変の原因はと、追究すると、問題は次々に残されているようです。

また、沿岸漁業が次第に衰えてゆくのは、世界のどこにも見られる現象で、北海道のしん漁業のたどった道、北朝鮮のいわし漁の運命、ヨーロッパでもデンマークのしん漁業等に、にがしい経験が伝えられています。

漁法の進歩に伴う人間の力が、あるいは、魚族をだんだん減少から滅亡へ追いこんでいるのではないのでしょうか。広い海を見ると、そんな気が話ごとく思われますが、宇田博士の潮目の研究によれば、魚の住む範囲、つまり条件のよい所は案外狭いようです。

落ちたものを拾うような漁業が改良され、稚魚の保護、産卵期の魚の捕獲の禁止、更に進んで、養殖と漁業が計画的に、合理的に、むしろ農業的になる特に、始めて海の資源の利用が正しくなったと言えるのではないのでしょうか。

皆さんは、野中兼山のお話を御存じでしょうか。高知県の浦戸湾に、はまぐりを放養した考えの深い人です。しかし、そうするためには、もっともっと、魚類に対する基礎的研究が行われねばなりません。魚の習

性等の生態の研究は、皆さんの将来に残された、大きな学問の空白と存じます。

入津湾の入口に、大きな洲があります。その先の、ちやうど湾の口の中央付近に、浅瀬があります。これは、貝類や藻類のよい繁殖地です。先年、とてもたくさん、やじろ貝が発生し、村の人はずいぶん利益をあげたようですが、たちまち取りつくしてしまいました。

それで、今度、中津からあさり貝を移すことに成功しました。規制を設けて、一年中に採る時期をきめました。オことに、りっぱな処置だと思えます。

藻も、段々畑のたいせつな肥料ですが、やはり、時期をきめて取るのは、よいと考えます。

番匠川の川口の女島では、かきを繁殖して、います。もとば、川底の自然かきをとっていましたが、更に、養殖を始めたのは、いかにも農家の持つ計画的な心持によく合う進歩ではありませんか。

あのあたりの軍用地であった間に、発生したたきさんのまで貝も、ほとんど二年もたため内に取りつくされませんでした。

人間は、とかく自然を利用するよりも、自然をこわすようなことを多くやっているようですが、これは遺憾です。

因尾川の川底が埋まって、うなぎやあゆがとれなくなりましてが、私は、川の利用法も考えてみたいと思えます。

一時、琵琶湖のあゆの放流が行われたことがありましたが、色々な方法で、あゆ・うなぎ・こい・ふななど、川に養殖されたら、山や、いなかの食物も、ずいぶんりっぱに栄養的になると思えます。皆さんは、きつとあの十和田湖でオすを養殖するのに成功した和

井内氏の苦心を思い出されると思えます。こんな、人々の利益になる仕事は、どんな有名な事業よりも尊くはないでしょうか。

川の利用法をもっと考えてみましょう。  
因尾川の奥の水力発電所は、昭和十八年の洪水ですっかりこわされました。山の中の発電所は、緑の木立とよく調和した、好ましいいけしきですが、文化の高いものほど、そのこわされたあとはいたましいものだと思いませんか。

ここごろ、小野市の奥では、中岳川の下流で、延岡のある会社が発電計画をして、測量したと聞きました。中岳川、田代川の合流地付近は、谷が深く、流れの速い所ですから、適当な場所にダムを築いて、川水を十ヶ所くらいか上流までためると、あるいは、かた小の電気が生まれる、かもしれませんか。(注、側点、(山本)険しい谷の側面には、たちのかねばならぬ家もできましようが、全体として、大きな資源の開発だと言わねばなりません。(引用文以上)

昭和二十四年頃、横川先生は「小野市の奥の中岳川、田代川の合流地付近は、谷が深く、流れの速い所ですから、適当な場所にダムを築いては、と述べています。

それから十三年後の昭和三十七年、総工費三十六億円で完成した北川ダムは、大分県の誇るアーチ式ダムで、常時四千五百万トの水をたたえ、県営北川発電として産業活動の基幹となっています。

この人造湖を利用した養殖で、内水面漁業の推進をはかっています。

佐伯市にも、木立ダムが木立川の上流に設けられてい

ます。

直川村赤水にあるダム記念碑の文面は左の通りです。

直川村防犯ダム建設記念碑

このダムは三億八千万円の巨費と五年の歳月を要した、直川村空前の事業である。これにより、流域百二十五ヘクタールの農耕地と住居道路等の安全は、永く確保されるであろう。

竣工に際し、建設の難を追憶して、関係各方面から寄せられた絶大な指導援助に深甚な謝意を表し、碑を建て感念を銘記する。

昭和四十六年三月

直川村長 泥谷 謹

施設監督	大分県農政部耕地課
施設工	株式会社 後藤組
堤長	八〇・五 M
堤高	二四・八五 M
有効貯水量	一四、三〇〇 M <sup>3</sup> 六二三、四〇〇 M <sup>3</sup>

黒沢ダム工事進む——佐伯市青山、黒沢

着工以来三年半、すでに大半ができあがり、巨大なコンクリートのかたまりが、姿をみせています。

このダムは、台風のために出水、被害を出していた番匠川の支流、堅田川をせきとめる県営の冷水ダムです。

重力式で、高さ四七・五m、堤頂の長さ二〇・三五m、総貯水量四、一〇〇、〇〇〇立方m、総工費一九五、〇〇〇万円。

昭和五十一年三月完成予定ですが、佐伯市では、ダムにポートを浮かべたり、周囲に遊歩道をつくったりして、市民のいこいの場所にする計画だそうです。

昭和二十四年頃、横川先生は「川の利用法をもつと考えてみました。因尾の奥の水力発電所は、昭和十八年の洪水ですっかりこわされました」と語っています。

昭和四十八年十月、大分県と本匠村は、同村腰越川の水を、野津町の県営石場ダムに供給する、取水設定について調印しました。

腰越川は、番匠川上流の、本匠村上腰越地区を流れている小河川です。県は昭和四十八年完成した石場ダムの貯水量が、計画より少ないので、腰越川下流の弥生町と佐伯市にも協力を求めていました。

しかし三市町村とも「大切な水資源を関係のない地域に供給することは好ましくない」という態度を取ってきましたが、取水量がわずかであるということで、結局、了承しました。

台風や集中豪雨などの降雨で、平常の流量を上回った分を供給することになり、取水を調整する権限は、本匠村長が持っています。

これによって、石場ダムは野津町野津地区の畑地かんがいの機能を、充分果たすことができるとしよう。黒沢ダムが完成すれば、更に床水川（弥生町）の上流にも、床水ダムが建設されるそうです。

昨年度、番匠川漁業協同組合は、約五百坪の稚アユを放流する計画でしたが、産卵期に池田湖、滋賀県の琵琶湖がいずれも不漁のため入荷できず、県水産試験場で人工ふ化し、海水で育てた稚アユを、約二百坪（五十坪匹あまり）を、番匠川・因尾川・久留須川に放流しました。

その放流も、例年四月上旬頃行なっていましたが大幅に遅れて、昨年度五月中旬にやっと実施することができました。そのため成育が悪く、六月一日のアユ漁解禁

は、七月一日に延期されました。

県下の各河川とも、川口付近が工場排水や、市下水道などで汚染されていたり、堤防工事の影響などで、自然アユの稚魚が減少しています。

他方、近年レジャーとしての釣りが、海・川を問わず盛んになっており、稚魚の放流や資源保護の施策が、積極的に押し進められています。

しかし、一般的に農業用水・工業用水によって、河川の水量は減り、ダム建設、砂利採取などのため、漁場は狭められ、荒廃しつつあり、また、農薬被害、水質汚濁などで、漁獲量は減少の一路をたっています。

九州農政大分統計情報事務所は、県下内水面漁業・養殖生産統計調査結果を「停滞する河川漁業」のテーマで研究発表しました。

佐伯地方の淡水魚種苗センター建設計画も具体化され、佐伯地域広域園事務所では、昭和五十年年度完成を目指して、準備を進めています。

番匠川・堅田川・水立川をはじめ県南の各河川は、コイ・ウナギ・アユなどの淡水魚の宝庫でした。

現在、河川に放流する稚魚も、安心院所の県内水面漁業試験の良材、県内外の生産地から買い求めていますが、計画通り確保できない現状にあります。佐伯市、南海部郡各町村や、各関係河川漁協からの強い要望もあって、種苗センターの建設が計画されています。

広域園事務所では、建設候補地の発生町と建設計画について協議し、早急に場所を選定することにきましました。総事業費三千五百万円で施設を作り、コイ・アユ・ウナギなどを育てるプランだそうです。

これによって各河川は、再び淡水魚が多くなることで

しよう。

### 瀬戸内海の栽培漁業

国は、沿岸漁業の水域に、瀬戸内海の地をえらびました。

昭和三十八、三十九年にかけて、瀬戸内海栽培漁業センターを創設、さらに増設されたのが上浦事業場へ上浦町津井です。従来の「とる一方の漁業」から、「つくる漁業」への方向転換ですし、つくりながらという栽培漁業です。

稚仔の育成に力を注いでいます。

卵からの人工化飼育と、天然産稚仔の採捕飼育、そして放流などが、仕事内容です。その対象魚種は、トラフグ・サヨリ・アサギ・マダイ・クロダイ・スズキ・ボラ・メバル・クルマエビ・アワビ・ブリなど、広範囲にわたっています。

明治三十三年四月に創設された大分県水産試験場は、昭和四十四年六月、臼杵市港町から上浦町へ移転しました。職員数四十五名、年間予算約八千七百万円（昭和四十四年度）です。

事業の概要は次の通りです。

### 一、漁業科

#### 1. 遠洋漁業試験指導

マグロ漁業および交棒漁業の漁場開発と経営の近代化を促進する。

#### 2. いそ根資源開発調査

アワビ・サザエ・トコブシ等の種苗放流、汽海漁場開発、海底漁田研究

3. 釣り、びえなわ飼料養殖試験

二 資源科

ゴカイの人工ふ化、飼育実験。

一 漁海況予報事業

1. 漁海況予報と毎週公表

2. 重要魚類生態研究

3. 沿岸重要資源調査

4. 瀬戸内海資源調査

5. 天然種苗資源調査

三 増殖科

1. 栽培漁業用の種苗に関する研究 (マダイ、カレイなど)

2. アユの種苗化実験 (人工ふ化)

3. 真珠養殖場の適正利用と病害防除に関する研究指導

4. ハマキの飼料試験ならびに病害に関する研究

四 水質科

1. 水質汚濁調査

五 水産相談室

1. 漁業技術改良化 (タコなど)、増殖技術改良化 (ノリなど)、技術導入等の試験

2. 移動水産試験場

水産試験場、淡海漁業試験場、内水面漁業試験場合同で実施

六 一日海洋教室

漁業後継者 (中学生対象) 育成を目的とした航海実習

(参考)

昭和三十一年 瀬戸内海栽培漁業センター上浦事業場設置

四十四年 大分県水産試験場上浦町津井に移転

五十年 淡水魚種苗センター弥生事業場設置予定

(この項おわり)



神の井 神武天皇の聖跡



佐伯名所

(船は全部機械船、今は手押し舟は残っていないだろう。)

神話の浦、日向泊

磯削の松は一本もなくなり、神の井と河(みきわ)との間に、高く道路が通じ、時々自動車を通る。しかし神話は生きていて、変らない磯波がそれを助けている。